

## &lt;書評&gt;

## 藤岡俊博 著『レヴィナスと「場所」の倫理』

東京大学出版会 2014年, 382pp.

西村正秀

本書は、藤岡氏による2011年の東京大学大学院総合文化研究科博士論文にいくつかの修正を加えて書籍化したものである。なお、その刊行に当たっては、第3回東京大学南原繁記念出版賞が授与されている。本書は、リトアニア出身の哲学者エマニュエル・レヴィナス (Emanuel Levinas: 1902-95) の研究書である。レヴィナスの哲学はエドムント・フッサールが創始した現象学的方法に基づくものであり、マルティン・ハイデガーの存在論に対する批判を重要な契機として含んでいる。さらに、そこにユダヤ教の思想が絡み合い複雑なものとなっている。このような彼の哲学を表す標語に「第一哲学としての倫理」がある。ただし、ここで言われる「倫理」とは、規範倫理やメタ倫理といった学問分野としての狭義の倫理学ではなく、人間同士の根源的な関係性を扱うより広義の教説である。レヴィナスの哲学は、現象学的方法に即して考察された私(主体)とその外部に存在する他者との関係を基礎に置く点で「他者論」とも形容されるが、その内実は『全体性と無限』(1961)と『存在するとは別の仕方』(1974)という二つの主著の間で変化を見せている。だが、それにも関わらず、他者に対する責任という形で実質化される倫理的関係こそが存在論に先立つというレヴィナスの主張は一貫している。このようなレヴィナス哲学の全体像については、多くの研究者が解釈を試みてきた。その中で本書の独自性は、先行研究では明示的に主題化されることが極めて少なかった「場所(lieu/place)」の概念を軸として、他の思想家からの影響やユダヤ教論考との関係を丁寧に押さえながら、彼の思想が「非場所の倫理」へと結実し

ていく過程を描き出したところにある。以下では、最初に本書の内容を要約した上で、いくつかのコメントを述べることにする。

本書は全五部から構成されており、場所の概念を軸としてレヴィナスの著作を1930年代から70年代まで時系列的にたどった書き方がなされている。第I部では、1930年代のレヴィナスの思想がまとめられている。レヴィナスの哲学はフッサールの現象学を起点としているが、著者の分析によれば、レヴィナスは30年代半ばからフッサールやハイデガーの検討を通して独自の哲学を展開し始めている。フッサールとハイデガーはともに世界を具体的な「環境世界」として特徴づけた。このような環境世界という場所と人間の結びつきを「存在への繫縛」と表し、そこからの逃走を模索し始めたのがこの時期のレヴィナスであり、その方法を場所からの自由を示唆するユダヤ教に求めていたことが、テキストを通じて示される。

第II部では、レヴィナスの初期の著作『実存から実存者へ』(1947)を中心として、後の『全体性と無限』で展開される場所概念がこの時点で既に用意されていたことが、ハイデガーとの対比に基づいて明らかにされる。ハイデガーが『存在と時間』(1927)で提示した場所概念は上述の環境世界であり、そこでは存在者は現存在から独立して予め存在するものと見なされていた。それに対して、レヴィナスは存在者の生成を問題とする。主体としての私は、「〈ある〉(il y a)」という無規定で非人称的な存在一般からの意識の局在化によって成立する。このような仕方では定位置される根源的場所(「ここ(ici)」)は内部性を持った私の身体であり、私の「同」の

領域となる。

第 III 部では、1950年代の著作から第一の主著『全体性と無限』（1961）までを扱いながら、レヴィナスの「場所」概念の解明が試みられる。レヴィナスが場所概念を展開するのは、『全体性と無限』第二部である。存在一般からの意識の局在化によって成立した私は、大地の堅さや風のそよぎといった世界における元基 (élément) を享受して他のものを自己に同化させていく。この活動は世界を統御して所有したいという「明日への気遣い」を生み出すが、所有や労働が可能となるためには私が自由に振る舞える「家」が必要となる。この家によって私の内部性すなわち「同」が成立する。本章では、「同」が自己の領域を拡張していく過程が詳細にたどられた上で、「同」から「他」が導出されていく論理が、レヴィナスによる後期ハイデガー批判の中核をなす「異教」概念の詳細な分析に基づきながら解明される。そして最後に、ハイデガーの「彷徨」概念をレヴィナスが自身の場所概念にどのように取り入れているのかが検討される。

第 IV 部は本書の到達点となる部であり、レヴィナス第二の主著である『存在するとは別の仕方』を中心に1970年代のテキストが上げられ、彼の哲学が「非場所の倫理」として結実の様子が描かれる。レヴィナスは、『全体性と無限』を執筆した後にジャック・デリダによる批判を受けて「同」と「他」の関係に関する考えに変更を加えたと言われる。その変更が展開されるのが『存在するとは別の仕方』である。本章は二つの主著の間に見られるレヴィナスの思想の変化を「場所論的転向」と特徴づけた上で、この転向を彼の思想が連続的に発展していったものとして解釈することを試みている。『全体性と無限』までは、私が成立する条件は「同の領域の確保」という静的かつ固定的な場所概念で特徴づけられていた。しかし、それ以降は、他者の隔時的な世界内への侵入ならびに絶え間ない私への接近という動的かつ不安定な場所概

念 (= 非場所の概念) による特徴づけがなされるようになった。この力点の変化が「場所論的転向」である。本章では最初に、非場所の概念を用意する「痕跡」(他者の侵入の形跡) と「近さ」(私と他者が不断に近づく運動) が、レヴィナスの思想の中で主題化されるようになった経緯が説明される。その後で、非場所のもとに特徴づけられる私の主体性が、『存在するとは別の仕方』の読解に基づいて説明される。具体的には、他者に対して常に遅れをとってしまう私が他者のかわりに記号化されるという「身代わり」の記号論が私と他者の倫理的関係の特徴づける過程が再構成された後に、私の非場所性と他者への責任の関係が「われここに」という聖書的表現によって肉付けされる様子が描かれる。そして最後に、このような非場所の倫理の構造が、レヴィナスの詩人論やレヴィナス思想と精神病理学の関係にも登場していることが確認される。

第 V 部では、レヴィナスによる非場所の倫理とユダヤ教論考・イスラエル問題の関係が考察される。最初にレヴィナスのユダヤ教育論が概観された後に、1948年に建国されたイスラエル国に対するレヴィナスの態度がたどられる。1950年代のレヴィナスは、ユダヤ人が背負わされてきた土地からの離散をユダヤ人の西洋への同化と関連付けながら肯定し、イスラエル国の建国を西洋とユダヤ教の関係を割くものとして批判的に評価していた。1960年代に入ると、レヴィナスはイスラエル国のあるべき姿を「イスラエル=約束の地=正義の国」という図式のもとで論じるようになる。そして1970年代以降は、既に国家として成立したイスラエル国の正当性が検討される。彼によれば、イスラエルの所有が正当化されるのは、その所有が正義に適合している場合に限られる。正義とは、私と他者の倫理的関係を社会的次元に開くものである。非場所の倫理では、私は他者に対する無限の責任を負う。しかし、他者が複数存在する場合には、どの他者に責任を負うべきかを定める「比較不

可能なものの比較」の必要性が生じる。これが正義の要請であり、そこでは私も他者と同じ「場所」に共存することになる。本章では、他者の間に差を設ける正義と他者への無限の責任を要求する倫理の緊張関係が指摘された後で、レヴィナスの哲学では正義と倫理をどちらか一方に解消することは不可能であること、これらが両立する「場所かつ非場所」が「ユートピア」であり、その両立は正義の国としてのイスラエルにおいても他者に対する責任が絶えず統制的役割を果たすという仕方を実現されることが、他者の超越性を意味する「高さ」の概念を手掛かりとして論じられる。

これらの議論を経て本書の「結び」で述べられるのは、非場所の倫理の重層性である。非場所の倫理は「同」の領域という場所を乗り越えることで到達されたが、レヴィナスにとって「ユートピア」とは場所と非場所の両立であり、場所は非場所の倫理にも残り続けている。他者は私を超越した高さを持ち、私は他者を見上げながら自己に降下する他者に対応するが、この対応こそが「責任」である。私と他者のこの関係は、私という主体がイスラエルという場所に置換されることによって、そのまま倫理と正義の両立というテーゼと化する。

以上が本書の要約である。では、本書はどのような価値を持つものとして評価できるのだろうか。本書の優れた点としては、次の点が挙げられよう。第一に、「場所」という、レヴィナスの思想において絶えず登場しているのにも関わらずこれまであまり主題化されてこなかった概念に注目し、この概念に対するレヴィナスの見解の変遷（場所から非場所への転回）を彼の思想体系の発展として描き出す点は極めて独創的である。また、本書はレヴィナスの思想を前期と後期で断絶したものではなく連続的に展開していったものと見なしているが、それはテキストに基づいて無理のない仕方であらわれており、非常にバランスの取れたレヴィナス解釈となっている。

第二に、本書はレヴィナス哲学の体系的理解を、レヴィナスの原著の読解だけから構成しているのではない。例えば、「非場所の倫理」の射程がレヴィナスの詩人論や精神病理学との関係から分析されたり、異教概念がフランツ・ローゼンツヴァイクの思想との対比に基づいて明確化されたりするなど、多角的な仕方であらうレヴィナスの思想に光が当てられている。著者が述べているように、レヴィナスは他の思想家を明示的に参照することが少ない哲学者であったが、ハイデガーやフッサールは当然のこととして、それ以外にも彼に影響を与えた思想家を取り上げてレヴィナスとの比較検討を行っている点は、哲学史研究書としての本書の価値を増大させている。

第三に、レヴィナスの哲学とユダヤ教との関係が掘り下げられている。この掘り下げは二つの方法で行われている。一つは、レヴィナスの思想形成においてユダヤ教が果たした役割の明確化という方法である。もう一つは、非場所の倫理とシオニズムの関係の分析という方法である。この分析の特徴は、倫理と正義の整合性が「高さ」の概念を用いて提示されている点にある。倫理と正義は絶えず緊張関係を孕みながらも、「高さ」として超越する他者への畏怖を契機として共存すべきものとして捉えられているという本書の診断は、レヴィナスの「政治哲学」の基礎を説得的な仕方であらう描き出している。

もちろん、著者自身が本書の「結び」で述べているように、本書には「場所かつ非場所」を理想とするレヴィナス倫理学が持つ射程の更なる解明という課題が残されている。著者による非場所の倫理と正義論の緊張関係の調停は、結局のところ現実のイスラエル問題に対してどのような解答を与えるのか。たしかに、非場所の倫理は狭義の倫理学ではない。しかし、複数の他者に優先順位をつける正義の要請は狭義の倫理学（規範倫理）に属するものであり、それに対して非場所の倫理から何が言えるのかについての考察は、（たとえレヴィナス自身はそれを

意図していなかったとしても)望まれるものであろう。だが、逆に言えば、本書はそのような発展的課題を可能にするほどの堅固なレヴィナス解釈を提供しているのであり、レヴィナス研究者にとって真剣に取り組むべき文献である。